

「日本のすごさは、特別活動にあり」

校長 松本 雅史

放課後こども教室の前に笹が飾られました。そうです、七夕の笹です。様々な願い事が書かれた短冊がたくさん笹に飾られています。一枚一枚から今の素直な「願い」が伝わってきます。

さて、先月13日に「こだいら特活の日」として、市内全公立小中学校で、学級会活動（話し合い）の授業公開がありました。併せて、各校の代表児童・生徒によるサミットが行われました。私たちの花小金井南中学校区のまちづくり宣言は、「笑顔とあいさつでみんなをつなぐ～心も環境もきれいなまち～」です。この宣言の具現化をはじめ、各校のこれまでの取組を交流し合い、今後について意見を交わしました。

「社会に開かれた学校」とは、よりよい社会をつくるという目標を、学校と社会が共有し実現していくことに他なりません。この「まちづくり宣言」を一人一人が自分事と捉え、まずは、家族、友達、クラス、学年、そして「学校」「地域」と「自分をど真ん中に置いた世界」を発達段階や実態に合わせて無理なく広げていき、「まち」を「ふるさと地球」と感じられ愛おしく思う感受性に高めていけたらと願います。

私が以前ご指導いただいた校長先生から、以下のようなご指導をいただいたことがあります。今回、特別活動を語るにあたり、ご本人の了解をいただきましたので、抜粋になりますがご紹介します。

<日本人はなぜにここまで気高く振る舞えるのか>

今回の大震災（東日本大震災）関係の報道で、外国の方の意見が目をはきします。

- ・「数百人が広場に避難していたが、その間、誰もタバコを吸うものはいなかった。」
- ・「毛布やお湯、ビスケットが与えられ、男性は女性を助けている。3時間後、人々は解散したが、地面にはゴミ一つ落ちていなかった。一つもなのだ。」
- ・「防災訓練を受けていても怖いはずなのに、誰もパニックに陥る人はいない。自分の仕事に集中し、連絡を取り合っていた」「われわれが学ぶべき多くのことが分かった。」・・・

諸外国が絶賛する日本人の行動について、昔からの日本人の美德だとか、日本人のDNAだという人たちがいますが、それは絶対に違います。戦国時代の様子や幕末の一揆・打ちこわし、大正時代の米騒動などをみれば、日本人だって諸外国並みに略奪をしてきたことがわかります。日本人だって普通の人間なのです。

ではなぜ、日本人が今回の大震災でそのような行動ができるのか。皆さんはおわかりでしょう。それは学校がそれを教えてきたからです。

役割を与えられたら責任を果たすこと、適切に改善案を出すこと、みんなで協力し合うこと、時には臨機応変に他の仕事の手助けをすること・・・保育園・幼稚園時代から数えれば、日本の子どもは何千日ものあいだ班活動や当番活動の仕方を繰り返し練習してきたことになります。

仕事が役不足だと声高に言うこともなければ、無償で働くなんて真っ平だとも言わない、自分が働いているように他の人も働いているだろうと素直に信じ、その総和が自分たちに幸福をもたらすだろうと単純に信じていることができる、それが特別活動という時間の枠の中で私たちが教え鍛えてきたことです。

「日本のすごさは、特別活動にあり」。日本の特別活動の大切さを理解していないのは、私たち教師も含め、日本人全体かも知れませんね。

7月の生活目標「ろうかは右側を静かに歩こう」

廊下は右側を歩くのは、学校生活でとても大切なきまりです。特に高学年は、ずっと言われてきていることなので、わかっています。ではなぜ守れない場面があるのでしょうか。こどもたちの思いのほとんどは、「急いでいるから」「時間に間に合わないから」。時間を守ろうとしているのは、とても立派なことです。しかし、そうだからといって、廊下を走ってしまうと、一緒に過ごしている皆さんが安全に過ごせません。時間を守るようにするためには、見通しをもつことが大事です。「廊下を走らない」ために、「時間に余裕をもって行動する」ことも意識していけるよう伝えていきたいと思います。

(生活指導主任)